

周作クラブ会報

(第71号)
2018年6月20日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

ペトロ岐部と野上弥生子 ゲッセル教授受章 原稿発掘	3面
長崎文学館便り	4面
周作クラブ長崎便り	5面
「周作クラブと私」	6・7面
劇団樹座の三十年⑧	8面
	9面
	10面

報告——第19回遠藤文学原点の旅

加賀会長と訪ねる。ペトロ岐部・大友宗麟ゆかりの地、大分

雲一つない空の下、心暖まるハプニング続出、充実の三日間

1日目

5月19日朝8時半過ぎ、羽田空港に集合した東京出発組は加賀乙彦会長、高橋千劍破幹事はじめ総勢12名。原点の旅皆勤の加藤宗哉幹事、今井真理幹事、亀岡園子総務委員が、揃って不測の事態・事故で泣く泣くキャンセルしたせいもあり、いつもより少ない寂しいスタートだ。それでも一行は元気に、会員でもある添乗員のトップツアー・福田さんに従い、明け方までの雨の止んだ大空へ、大分空港目指して飛び立った。

11時半、大分空港に先着していた愛媛からと海外から帰国中の参加者の2人、そして一歩遅れて伊丹空港から着いた関西組2人を迎え、16名となって貸し切りの大分バスに乗り込んだ。ベ

テランバスガイドの案内を受けてほぼ1時間、JR日豊線の宇佐駅で福岡からの2人、岡山からの2人を加え、これで第一日目の行動を共にする20名が揃った。この時間、長崎から参加のメンバーが乗った九州横断バスは、別府を目指し、すでに長崎駅前を発車しているはずである。

最初の立ち寄り場所はレトロの街、昭和の街を謳う豊後高田市中心街。ボンネットバスが走り、ミゼットが飾られ、「赤胴鈴之助」の歌がスピーカーから流れる「昭和ロマン蔵」の中の「旬菜 南蔵」という店で昼食を取った。見学、おしゃべり、交流の楽しい旅はもう始まっている。

続いて全国4万の八幡宮の総本社、宇佐神宮を訪ねる。宇佐鳥居を潜り、長い階段を登り、朱塗りの本殿に至る。

日本人の宗教心発祥の雛形とも言われる御許山の頂が見える。

次に訪れた富貴寺、条件が合わなければ入堂禁止になるという国宝の大堂が、晴天のおかげで公開されており、丁寧な説明も受けられて、樞材寄木造りの柔和な表情の阿弥陀如来坐像も、東西南北四壁に描かれた歴史を感じさせる浄土図も見ることができた。

これで一日目の見学は終わり、バスは別府の「亀の井ホテル」を目指す。周作クラブ長崎の一行7名、それに東京からの別行動1人もすでにホテルに着いているという。大急ぎで温泉につかったあとの第一日目の夕食はバイキング形式のため、我々だけの夕食会という形式は取れなかったが、固まった一画のテーブルを確保してもらい、28人全員が一堂に会して食事を楽しむことができた。

2日目

雲一つない真つ青な空が、旅行二日目の我らを迎えてくれた。朝8時半ホテル出発、バスは一路国東半島海岸線を南から東へ回りこんで、半島北端の「ペトロカスイ岐部神父記念公園」を目指す。国東市国見町のこの公園は土地の人たちの協力で作られたようだ



公園内の記念聖堂

が、ペトロ岐部の銅像があり、小さく美しい記念聖堂が建てられていた。我々の訪問に合わせて、聖堂の扉は開かれていた。しばし陽光の下で岐部の像に親しんだのち、聖堂に入って、加賀会長からペトロ岐部にかかわるお話を伺った。

この公園から600メートルほど離れた場所に岐部神社がある。天大将军宮を祭神とするこの神社だが、処々にキリシタン文様があるということで話題になっているようだ。ハートやひらぎ、3本のくぎが刻まれた灯籠に我々も見入った。

さて公園に隣接して「国見ふるさと展示館」がある。明治初期に築造された庄屋屋敷を利用した町の施設だが、ここにはペトロ岐部にまつわるものを含む文化資料が飾られている。その資料を見学したあと、併設の「城山亭」で昼食となった。



ペトロ岐部記念公園にて全員集合



◀ 岐部洋さんと加賀会長



▶ 聖堂の中でペトロ岐部について語る加賀会長

食事を満喫し、陽光と風光を満喫した我々が出発のバスに乗り込もうとした時、思いがけない出来事があった。聖堂の開閉の件で我々の訪問を知った岐部洋さんという方が、「遅くなった上に足を止めさせて申し訳ありません」と言いながら駆けつけてくれたのだ。岐部さんはペトロ岐部の32代目に当たる方で、この地に生まれ、公園や聖堂の施設・建造、そして管理に力をつくされているという。感激の対面であった。早速加賀先生は手元の『殉教者』にサインして贈呈された。

バスは海岸にある「道の駅くみに」に寄って皆で姫島を眺めたのち、一気に南へ進路を取り2時間、別府、大分を超えて、白杵へ向かった。このバス

の中で高橋幹事は大友宗麟と遠藤先生のことを語り、マイクを向けられた私(宮辺)は、遠藤先生が大友宗麟を書くに至った裏話と劇団樹座大分公演のことを話した。

白杵は大友宗麟が湾内に浮かぶ丹生島に城を築き、大友氏の拠点とした町である。我々は城跡を眺め、歴史の残る古い町並みを歩いた。

そして白杵と言えば、作家・野上弥生子が生まれ育った町、生家・小手川酒造は今も営業し、野上弥生子文学記念館を併設している。我々は記念館を訪れ、また酒造で試飲し面白い物を楽しむことになった。

陽も傾いてきた。バスは最後に白杵市の不思議のひとつ、私有地にある大

きな岩の崖面に、円に囲まれたクルスが彫られている野津町の「磨崖クルス」を訪ねてから、今夜の宿「レンブランホテル大分」へ向かった。

予定時刻をだいぶ超えている。今晚は「加賀会長を囲むでの懇親夕食会」である。その冒頭には会長のお話「講演が企画されており、会長は原稿を用意されていた。バスでの移動時間は45分あるという。と、いきなり先生がマイクを持たれ、「食事をお預けにしたまま私の話を聞かせるのは気の毒だ。今、この時間を使って、予定の話をご

こでする」と仰った。お心遣いである。皆は感心し、感謝し、先生のお話に聞き入った。お話は「野上弥生子の作品について」「野上弥生子と私」という、発見に満ちたものであった。

夕食会は冒頭に15分ほど、バスの中で話しきれなかったお話を加賀先生が続けられたあと、乾杯をして、食事、歓談の時間となった。籤引きで4つに分散した各テーブルでは、それぞれ賑やかに話が弾んでいた。予定時間の半ばを過ぎたころ、例によって原点的旅初参加のメンバーによる挨拶をお願いした。皆さん、実のあるお話を披露され、2時間の夕食時間はあつという間に過ぎていった。

3日目

この日も快晴、今回の旅行は天候に恵まれている。8時出発、バスはまた一路南下して、昨日の白杵を越え、津

久見の大友宗麟墓所へ向かう。

宗麟はこの地で58歳で病没、この墓所には、寛政年間に新調された仏式の墓碑と、昭和後期に整えられたキリスト教式の墓碑が並んでいた。

そしてバスは再び一気に北上、再度大分、別府を抜け、日出の「トラピスト修道院」に立ち寄った。

ここでまた思いがけない出来事があった。修道院の仕組みを親切丁寧に説明してくれ、更には修道院制作のクッキーを始めとする土産物に対する我々の爆買い(?)に、たった一人で丁寧に対応してくれていた若い修道士が、出発間際の我々のバスにおおずおと近づいてきて、「私は加賀先生のファンなのです。先生の本があつて今の私があります。この本にサインしていただけないでしょうか」と言っていて『帰らざる夏』の単行本と文庫本を差し出したのだ。加賀先生はもちろん喜んで署名され、固い握手を交わされた。見守る者も感激のご対面となった。

バスは最後の行程に向かった。城下鰯を食べる日出町の「能良玄家」での昼食、日出城址およびその海岸の散策を経て、殉教公園「日出藩成敗地跡の見学である。

いよいよお別れである。日豊線杵築駅で、長崎組・福岡組・岡山組・愛媛組等13人が手を振って降りていった。残る羽田組・伊丹組15名+福田さんに乗せ、バスは大分空港へ向かった

(記/宮辺 尚 撮影/清水優子)